別紙様式３

令和元年度　【　学園研究費助成金＜ B ＞　】研究成果報告書

学部名　国際コミュニケーション学部

ﾌﾘｶﾞﾅ　ﾅｶﾞｻﾜ　ﾀﾀﾞｼ
氏　名　長澤　唯史

研究期間　令和元年度

研究課題名　K-POP および現代韓国文化に関するポストコロニアル的視点からの研究

研究組織

	氏　　名	学　　部	職　　位
研究代表者	長澤　唯史	国際ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学部	教授
研究分担者			
研究分担者			

１．本研究開始の背景や目的等（200 字～300 字程度で記述）

現在、日本を始めとして世界中で人気の韓国大衆文化、なかでも K-POP と呼ばれる音楽ジャンルについてその音楽的・文化的・政治的な意義を、主としてポストコロニアル研究の立場から検討することを目指した。日本語で書かれた K-POP に関する学術的文献はいまだ限られており、また韓国の歴史、とくに日本による植民地化や戦後の日韓関係の中で韓国の大衆文化を論じるものも少ない。そこで本研究では（１）韓国音楽の歴史的背景と、戦後韓国の社会・政治との関連、（２）戦前の日本による植民地政策と戦後の日本およびアメリカ文化との関係、（３）音楽業界やテレビ業界のシステムとそのコンテンツに対する日本およびアメリカの影響、（４）日本での受容の現状、などについて明らかにすることをめざした。

２．研究の推進方策（300 字程度で記述）

上記の研究目的についてそれぞれ、以下のように研究を進めた。
（１）戦後の韓国、とくに軍事政権期（1961-92）の文化政策に関して、文献資料などを基に調査する。（２）戦前および戦中の日本占領期における日本文化の影響、および戦後の日米の文化的影響について、文献資料を基に検討する。（３）テレビドラマや映画、音楽作品などの具体的な分析と、日米の作品との比較を行う。（４）現地調査を交えながら、実際のファンへの聞き取り調査なども行い、その実態について明らかにする。

上記の目的のために、石田他（2007）、金（2013）、鄭（2017）、Lie (2015)、Jin (2016)、Kim (2018) などの各種文献をもとに情報収集と分析を行い、それと並行して具体的なコンテンツの収集と分析、関連する地域（ソウル、新大久保など）での現地調査なども行った。

３．研究成果の概要（600 字～800 字程度で記述）

韓国の歴史・政治・社会については、大韓民国の成立から軍事政権期（1963-88）を経て、その後の民主化から現在に至るまで、各種資料を通じて、文化形成への影響がきわめて大きかったことが明確になった。とくに政府による規制・抑圧から積極的な振興政策まで、国家、政府が積極的に文化政策に関わってきたことが、韓国ポップカルチャーの性格を決定づけたことは間違いない。それは人的・財政的なリソースの選択と集中という形で現れ、その結果として韓国の現代文化はやや多様性を欠いた、均一的なものとなっている。だがその状況判断や国際的視野、将来への展望などについては、海外経験が豊富でグローバルな視点を持つクリエイター、製作者が多数輩出されていることにより、的確な判断が下されている。その結果として、現在の世界的な韓国文化のブームにつながっている、という構図が明確となった。

また日本やアメリカとの関係においても、韓国の経済成長や通貨危機による IMF 体制のような国内事情と、冷戦の終結以降の交際情勢などの影響で、その関係性が変化している。簡単に言えば日本からアメリカへのシフトである。これも韓国ポップカルチャーのグローバル化に大きく貢献している。ビジネス的な展開としても、文化的コンテンツを観光資源として積極的に利用する戦略が、日本のクールジャパン戦略と比較しても極めて巧みであり、この点も韓国の国際的プレゼンスを高める効果をもたらし、それが韓国文化の更なる人気へとフィードバックされている。

最後に日本での人気については、一部メディアでの「カウンターカルチャー」としての韓国文化という分析は的外れであり、その受容者の多くが政治的意識の希薄な若者たちであることと併せて考えれば、アメリカ文化に変わる新たなグローバルカルチャーとして受容されていることが明らかとなった。

４．キーワード（本研究のキーワードを１項目以上８項目以内で記載）

①ポップカルチャー	②韓国	③K-POP	④韓国映画
⑤社会学	⑥メディア研究	⑦歴史学	⑧

５．研究成果及び今後の展望（公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。）

本研究のまとめとしては、２０２０年度の椙山女学園大学研究論集への投稿を目指し、論文の執筆を行う予定である。

またこの研究の成果の一部は、以下の論文に利用されている。

長澤唯史、「ウッドストック、ロックとカウンターカルチャー――再考と再評価の試み」、『文藝別冊ウッドストック 1969』、河出書房新社、2019.

長澤唯史、「女々しくて辛い場所に辿り着いたアイドル――マーヴィン・ゲイと 60 年代の感情革命」『文藝別冊マーヴィン・ゲイ』、河出書房新社、2019.

さらに、オープンキャンパスの模擬授業、椙高土曜講座などの各種講座でも、本研究の一部の成果を公表している。また本研究を元に、２０２０年度の科学研究費補助金（基盤 C）の申請も行っている。